

瀬能《九七式中戦車チハ》英里子

TOPCAT「果てしなく青い、この空の下で...。」瀬能 英里子

巡航戦車設計案A13をベースに開発された、芳野《八九式中戦車》雨音の後継車両。戦間期から第2次世界大戦前半の日本機甲部隊の主力戦車。巡航戦車 Mk. カビナントー とほぼ共通の車体に日本で設計した砲塔を載せている。主砲は57ミリ短戦車砲（18.4口径）最大装甲厚は30ミリ、重量は17トン。エンジンは三菱 瑞星 をデチューンして搭載した（240hp）。装甲はリベット留めで、懸架装置はクリスティー式。同時代の他国の戦車（T-26や 号戦車）に比して全く遜色のない、機動力と防御力に優れた戦車であった。瀬能《九七式中戦車チハ》英里子の「不幸」は参謀本部が対戦車戦闘の実態を理解しなかったために生じた。

瀬能《九七式中戦車チハ》英里子の開発において、技術研究本部と参謀本部との間で意見の対立があった。次の主力戦車に対戦車戦闘能力を強化した巡航戦車を考えていた技術研究本部に対して、参謀本部は小型軽量かつ安価な戦車の配備を強く望んでいたのである。参謀本部の考えでは、戦車は歩兵に随伴して機関銃座を破壊するのが第1の役割であったし、対戦車戦闘は歩兵の対戦車砲（機動砲）と肉迫攻撃で対処する、というのである。それに海軍の「八八cm艦隊計画」推進によって圧迫される陸軍予算の中で戦車の数を揃えるには安価であることが必須であった。果ては金のかかる「機甲科」を廃止し、戦車中隊ごとに分割して「歩兵科」に配備するという暴論まで飛び出した。対立は果てしなかったが、遂に妥協が成立した。車体は技術研究本部案の巡航戦車を採用するかわりに参謀本部案の57ミリ短戦車砲を搭載したのである。いかにも日本的な妥協の仕方であったが、装甲貫徹力の欠如が本車の致命的な欠陥となり、1939年にBT戦車に敗北する原因となった。1938年当時、日本は瀬能《九七式中戦車チハ》英里子の中国大陆への輸出を始めており、国府軍では芳野《八九式中戦車》雨音と共に瀬能《九七式中戦車チハ》英里子でもって鉄牛部隊を編成し、共産軍に大打撃を与えることに成功した。これがソ連の大規模な介入を招いた。翌1939年、スターリンは「軍事顧問団」を2個旅団に相当するBT7戦車と共に派遣し、内蒙古の綏遠で国府軍鉄牛部隊を粉砕したのである。戦車の損耗率が40%に達する大敗北であった。衝撃を受けた日本陸軍は直ちに調査団を派遣した。このままでは瀬能《九七式中戦車チハ》英里子の存在価値がなくなり、ひいては「機甲科」が存続し得なくなってしまうという危機感が調査団を駆り立てていた。調査団の見た戦場は日本製戦車の残骸で覆われていた。射貫されて搭乗員の血に染まった芳野《八九式中戦車》雨音、逃げまどったところを後部から貫通された瀬能《九七式中戦車チハ》英里子、なかには涸れ河に落ちて木にひっかかり宙吊りになった瀬能《九七式中戦車チハ》英里子の

姿まであった。国府軍に参加していた日本の「軍事顧問」には衝撃のあまり幼児退行を起こす者や言葉を話せなくなる者、無気力に陥る者、軍上層部をなじる者が多く現れていた。綿密な調査の結果判明したのが、主砲威力の貧弱さであった（敗北の第一原因は国府軍の指揮の拙劣さであったが公表しては政治問題になってしまうため、それは伏せられた）。57ミリ短戦車砲ではBT7の装甲を貫徹できずに弾かれ、逆にBT7の放つ砲弾が日本製戦車を串刺しにしてしまい、ために国府軍兵士はパニックを起こして大敗北を喫したのである。調査団の持ち帰った報告が公表された結果、兵器開発への参謀本部の容喙は概念段階まででとどめられることとなり、続いて 瀬能《九七式中戦車チハ》英里子 の強化策研究が始まった。そして、三人乗りの大型砲塔に長砲身47ミリ戦車砲（48口径、初速810m/s）を備えた 瀬能《九七式中戦車改（新砲塔チハ）》英里子 が、わずか二ヶ月で完成した。奇跡のような早さであったが、技術研究本部では当初から大型砲塔、長砲身47ミリ戦車砲を装備した戦車として開発しており、参謀本部の容喙によってわざわざ攻撃力を弱めて 瀬能《九七式中戦車チハ》英里子 を完成させていたのである。つまり 瀬能《九七式中戦車チハ》英里子 は改型で本来の姿を取り戻したのだ。

瀬能《九七式中戦車改（新砲塔チハ）》英里子 は直ちに量産に移され国府軍に無料で60両が供与された。同時に1個連隊分の「軍事顧問」も派遣され、1940年に外蒙古からの侵入を図った「共産義勇軍」を壊滅させることに成功したのである。この時、BT7は 瀬能《九七式中戦車改（新砲塔チハ）》英里子 に全く対抗できなかったし、この勝利で参謀本部が言い出していた「機甲科」廃止云々の話は完全に立ち消えた。日本製兵器への信頼も取り戻せた。怒り狂ったスターリンは指揮官ジューコフ將軍をサボタージュ容疑で銃殺刑に処した。しかし凱歌の時は短かった。ソ連がT-34/76Aを投入してきたのである。瀬能《九七式中戦車改（新砲塔チハ）》英里子 は瞬く間に蹴散らされ、日本は75ミリ砲装備の 穂村《一式中戦車チハ》悠夏 を投入することでようやく対等に持ち込んだ。瀬能《九七式中戦車改（新砲塔チハ）》英里子 の受難はさらに続く。イタリア軍のエジプト侵入に始まる北アフリカ戦線に英軍の増援として派遣され、精強をもってなるDAKに対して日英の（数量上の）主力戦車として戦わねばならなかった。本来の主力たるべき 穂村《一式中戦車チハ》悠夏 の数が揃ったのが1942年末であったからだ。伊M13/40には優位であったが、号とは何とか互角、号相手には不利であり苦闘を強いられた。さらにDAKに号 パンテル が出現するに及んでは「やられ放題」であった。何しろ距離3000メートル以遠で正面を貫通されるのでは対抗できるはずもない。日英軍のインド撤退以降は訓練用戦車となり前線から下げられている。かように日本機甲部隊の主力として東西に「奔走した割りには報われない」戦車であったが、足周りにクリスティー式の懸架装置を持ち、トランスミッションとエンジンを機関室に配置（この時点ではパワー・パックの概念は成立していない）するリアエンジン・リアドライブという、現代まで続く日本戦車の基本形を確立した戦車である。その意味で多くの後進たる「生徒」を育て上げた、日本機甲部隊の「教師」だったと云える。

■ 要目

・重量（t）	17
・乗員（名）	4
・寸法（m）	
・全長	6.20
・車体長	6.20
・全幅	2.54
・全高	2.59
・最低部地上高	0.40
・履帯幅	0.45

- ・ 発動機
 - ・ 三菱 瑞星 出力 240 h p
- ・ 装甲 (mm)
 - ・ 砲塔
 - ・ 前面 30
 - ・ 側面 20
 - ・ 後面 20
 - ・ 上面 10
 - ・ 車体
 - ・ 前面 30
 - ・ 側面 20
 - ・ 後面 20
 - ・ 上面 10
- ・ 武装
 - ・ 火砲 57 mm × 1 (L 18 . 4)
 - ・ 銃器 7 . 7 mm × 2
- ・ 能力
 - ・ 最大速度 (km / h) 44
 - ・ 航続力 210 km

■ 要目 (瀬能《九七式中戦車改 (新砲塔千八)》英里子)

- ・ 重量 (t) 20
- ・ 乗員 (名) 5
- ・ 寸法 (m)
 - ・ 全 長 6 . 20
 - ・ 車体長 6 . 20
 - ・ 全 幅 2 . 54
 - ・ 全 高 2 . 59
 - ・ 最低部地上高 0 . 40
 - ・ 履帯幅 0 . 45
- ・ 発動機
 - ・ 三菱 瑞星 出力 240 h p
- ・ 装甲 (mm)
 - ・ 砲塔 前面 50
 - ・ 側面 20
 - ・ 後面 20
 - ・ 上面 10
 - ・ 車体 前面 30
 - ・ 側面 20
 - ・ 後面 20
 - ・ 上面 10
- ・ 武装
 - ・ 火砲 47 mm × 1 (L 48)
 - ・ 銃器 7 . 7 mm × 2
- ・ 能力
 - ・ 大速度 (km / h) 40
 - ・ 航続力 200 km